

## 遠山郁三

— 戦時下の難局に向き合った一医学者の肖像 —

永井均

一

ここに戦争中の立教の日々を詳細につづった四冊の古本資料センターに引き継がれたいわゆる「遠山日誌」がそれである。一九四〇年四月〜四三年一月までを網羅するこの日誌にいち早く注目し、初めて立教の歴史叙述に用いたのは、大学史資料室嘱託の中野実氏（元東京大学助教・故人）であった。中野氏は一九九一年一月に発表した「昭和戦前期の私立大学―立教大学の場合」と題する研究ノートで「遠山郁三学長・学院総長が記したと思われる『遠山日誌』を紹介し、長く埋もれていた史料に光を当てた。その後、日誌の分析と遺族への確認を経て、この日誌が遠山郁三（一八七七一―一九五一年）の手によるものと確定されたのは一九九七年七月のことである。

「遠山日誌」は立教の歴史にとどまらず、近代日本教育史研究にとつても重要な史料で、例えば大学における戦時動員の観点から、従来の先行研究の空白を埋める素材であることが最近指摘されている。A5版のノート

二

に主としてインクでびっしりと記されたこの日誌は、紙の酸性劣化とインク焼けという「近代の手稿資料に特有の『二つの病気』」を抱えており、長く保存するために二〇〇四年に脱酸・抗酸化処置がとられた<sup>4</sup>。

遠山郁三は一八七七年三月一日、父道榮、母うたの次男として岐阜県土岐津町に生まれた。一八九八年七月に第一高等学校を卒業し、東京帝国大学医科大学医学科に進学した。一九〇二年一二月にこれを卒業し、翌年二月に同医科大学副手、六月には同助手となった。その後、一九〇四年六月に同大学大学院に進学し、皮膚科学者としての一歩を踏み出した。一九〇五年一月には吐鳳堂から『最近淋疾療法』を出版している。一九〇七年八月に同大学講師となり、この年の一〇月には、わずか三〇歳で官立の仙台医学専門学校教授の職に就いた。仙台医学専では皮膚病学や花柳病学について教鞭をとり、翌一月には医専附属の宮城病院皮膚毒科長も兼任した。

一九一二年四月、遠山は発足したばかりの東北帝国大学医学専門部の教授に着任し、翌一三年四月に同専門部附属医院の皮膚科医長に任じられた。同じ一九一三年一月には吐鳳堂書店から『小児期ニ於ケル主要ナル皮膚病』を出版している。そして一九一四年一二月に「連圈

状批糠疹ニ就テ」と題する論文で東京帝大から医学博士の学位を授与された。一九二七年三月からは皮膚科学の研究のため、アメリカとスイスで二年近く留学生生活を送った。留学中の一九一八年四月に東北帝国大学医科大学教授となり、さらに翌一九一九年四月には東北帝国大学教授に任じられた。一九一九年四月末に帰国した遠山は、東北帝大教授として皮膚病学微生物学講座を担当することとなった。一九二〇年七月には同大医学部長に就任、二年七月までその任にあった。

恩師の土肥慶蔵教授の停年退職後を襲って、母校の東京帝大に教授として迎えられたのは一九二六年九月のことである。遠山は医学部に勤務し、皮膚科学および泌尿器科学の講座を受け持った。一九二八年六月には宮内省嘱託を拝命し、三一年には日本性病予防協会の会頭にも就任した。この間、一九二九年に「皮膚病と全身」と題する論文を執筆、指導教授の土肥教授らと朝日新聞社編『通俗医学講座』第二輯に寄稿した（土肥教授との共著には南山堂刊の『彩色皮膚病圖譜』全三巻もある）。さらに一九三五年七月、文部省の命で欧米各国に出張し（帰朝は同年十二月）、ブタペストで開催された国際皮膚科学会に出席、翌三六年七月には中華民国への出張を命じられている。一九三六年に『微生物療法の実際』（臨牀医学講座第四一輯、金原商店）、『横痃の診断及治療』

（市川篤二と共著、南山堂）という二冊の著書を相次いで出版するなど、この頃、遠山は充実した研究生活を送っていた。

### 三

遠山郁三は科学者であり、非常にはつきりした自我というものを持っていたとされる。自己を厳しく律し、勤勉家であった。細密この上なく、事の曖昧さを許さないところがあり、学界では臨床診断における「比類ない綿密さ、精確さ」をもって知られた。その几帳面さは私生活にも表われ、例えば洋書で覆われた書齋は「一糸乱れず」の状態であり、机の上の鉛筆はどれも同じ長さに削ってあった。酒・タバコは嗜まず、早寝・早起きの毎日を送った。子供たちの門限に厳しく（女の子は六時）、厳格な面がある一方で、「少しマナーを教えておかなければいけない」などと理由をつけて、多忙な中を工面し、子供たちをしばしば銀座に連れ出して食事をご馳走するなど、温和な一面もあった。

遠山郁三はまた、仙台赴任時に洗礼を受けて以来、熱心な聖公会の信徒でもあった。洗礼を決意したのは、妻千代子の影響とも、姉華子の感化を受けたとも言われる。東京帝大に移ってから、毎主日（日曜日）には自宅から聖テモテ教会に通い、礼拝にはほとんど欠かさず出席

した。晩年に健康を損ない、起居が不自由になっても、「さあ教会だ」と言って洋服に着替えて玄関に向かおうとしたという<sup>10</sup>。娘たちには、就寝前に床の間に正座して「日々の祈り」を唱える父の姿が長く記憶に残った<sup>11</sup>。

#### 四

すでに明らかのように、一途に医学畑を歩んできた遠山郁三は、立教と何ら直接の関わりを持っていなかった。そんな彼がなぜ、一九三七年四月から立教大文学長に就任し、事務を執ることになったのか。それは、多分に当時の学内状況と関係がある。前任者の木村重治学長が前年の一九三六年四月二十九日の「天長節」祝賀礼拝時、チャペルの聖壇の下段で教育勅語を捧読したことが「不敬」だとして問題視され、学内で木村学長の排斥運動が沸き上がり、学生たちが総退学を決議するなど、立教での未曾有の「騒動」に新聞各紙の注目が集まった<sup>12</sup>。結局、木村学長は七月七日に引責辞職に追い込まれ、以後しばらく学長のポストは空席のままとなった<sup>13</sup>。

しばらく手のないなかった学長ポストをめぐって、遠山に白羽の矢が立ったのは、主として三つの理由によると思われる。第一は、遠山が熱心な聖公会信徒であったことである。第二は、当時立教を覆っていた学

内の「派閥争い」に遠山が無関係であったことである。遠山の学長就任直後、久しぶりに来日し立教を訪れた元立教学院総理ヘンリー・セントジョージ・タッカー主教が、「昨年立教を襲った危機の際に頂点に達した派閥争いに、彼〔遠山―永井註〕が何ら係わり合いを持っていないことで、彼は自身の考えに従って自由に立教の諸懸案に対処することができる」と観察したのも、そのことを示唆している<sup>14</sup>。皮肉にも立教に無関係だった点こそが重要であった。そして第三に、遠山が一九三七年に還暦を迎え、東京帝大を停年で退官するという個人的事情もまた、学長を引き受ける際の追い風になったと考えられる。

一九三六年一月には、後任候補者が遠山に絞られた模様で、立教学院理事長チャールズ・ライフスナイダーが遠山を往訪・面談し、一月七日には遠山が立教を訪れて理事たちと懇談、「理事会が満場一致推薦スレバ」就任受諾の意向がある旨を伝えた。かくして、同月三〇日開催の立教学院理事会で、一九三七年四月一日より遠山を立教大学学長に迎えることが「満場賛成」で可決、決定された<sup>15</sup>。「木村博士の後任として名前が挙がっている人々の中で、遠山博士ほどその任にふさわしい人はいない」と、ノーマン・ビンステッド理事が米本国に書き送ったように、立教学院首脳が遠

山に寄せる期待感はまことに大きかった<sup>16</sup>。

## 五

一九三七年四月一日から遠山郁三は学長室で執務を開始した<sup>17</sup>。遠山の新学長就任の報は立教学院関係者に「意外の感」をもって受け取られたようである<sup>18</sup>。遠山本人も就任の挨拶の中で「全く思ひがけぬこと」と述べ、私立大学での要職経験がない自分が「学長の重任に堪え得るや否や、誠に任重くして道遠しの感がありまして幾度か躊躇煩悶した」と告白するほどだった。にもかかわらず、あえて引き受けたのは、「之を以て私を試煉すべく新に与へられた尊き神命なりと感じ、成敗を眼中に置かず、唯至誠のみを以て盤根錯節を解かんと覚悟し」たからである<sup>19</sup>。

学長就任後の活動ぶりについて、一九四一年二月の『立教大学新聞』は次のように伝えている。「学長就任―永井註」以来真摯な態度と円満なる人格をもつて着々と学内行政の上に実績をあげられ……アメリカ研究所の設立に又文学部経済学部両研究室の創設等の業績を記された<sup>20</sup>。この間、一九四〇年一〇月四日に立教学院理事に就任し、一月五日には総長を辞任したばかりのライフスナイダーの推薦で学院総長をも兼任することになった<sup>21</sup>。遠山学長は一九三八年七月から東

京通信病院の院長も兼ねており、ライフスナイダーは立教の執務に専念してくれることを望んだが、遠山はこの願いをも聞き入れ（四一年二月に東京通信病院長の職を辞した）、立教学院総長と立教大学学長という二つの重責を担う道を選んだ。かかる遠山の決断は、彼に信頼感を寄せるライフスナイダーらアメリカ人宣教師を喜ばせた<sup>22</sup>。奇しくも同じ一九四〇年一月五日、理事たちは理事会の席上で、立教において今後ともキリスト教主義を堅持していくことに満場一致で賛成し、その旨を誓った「誓詞」に全員が署名した<sup>23</sup>。遠山は戦時下の厳しい時期に、立教のキリスト教主義を擁護し、中学・大学の教学運営の舵取りに尽力する使命を負うこととなったのである。

## 六

今や立教学院総長にまで上りつめた遠山は、文字通り粉骨碎身の日々を送っていた。特に日米開戦直後から、自らも財団の理事を務めていた聖路加国際病院との合併による立教大学医学部の設置計画を強力に押し進めたが果たせず<sup>24</sup>、一九四三年一月末に学長、総長、理事という全ての要職を辞した。辞職の決断は、いくつかの要因が複雑に絡み合っただけでなされたものと思われる。例えば、一九四二年一月に挫折した医学部設置

問題の責任をとったとも見れるし、また追い打ちをかけるように同年一月二〇日に伝えられた、長男・郁雄（立教大学経済学部卒）の戦病死が与えた深い悲しみが作用した可能性も否定できない<sup>25</sup>。

加えて、看過してはならないのは、日米開戦以後、キャンパス内で「建学の精神」を守ることが極めて困難となった立教の学内状況であろう。一九四二年九月二九日の立教学院理事会は学院の寄附行為と大学学則の存立目的条項から「基督教主義」という文言の削除を決定し、さらに翌一〇月にはチャペルの一時閉鎖を決めるなど、配属将校や卒業生、さらに学内の圧力を背景にして、立教からミッシヨンスクールの色彩は失われていった<sup>26</sup>。アメリカ人宣教師らに請われ、期せずして立教の最高責任者となった医学者・遠山が、ミッシヨンスクールを事実上葬る場に立ち会わなければならなかったことは、皮肉というほかはない。家庭では大学での出来事を何一つ語る事がなかった遠山が、家族に対して、チャペルが「壊される。あれをみんな薪にしてしまふ」と嘆いたことにも、その苦悩のほどが窺える<sup>27</sup>。このような学内でのキリスト教に対する厳しい圧力が<sup>28</sup>、信仰心の厚い遠山をして、立教から去る決意を固める主な原因になったのではないだろうか<sup>29</sup>。一九四三年一月三〇日の「日誌」には、松崎半三郎理

事長らが遠山のもとを訪れ、「〔理事会で―永井註〕立教学院総長、理事、立教大学々長辞表受理せりと公式口頭通達ありたり、余の任務終了せり」と書かれている（後任が決まるなどして、理事会の席上で遠山の辞表が正式に受理されたのは二月一三日のことであった<sup>30</sup>）。立教を去った遠山は仙台に疎開し、そこで終戦を迎えた。その後、東京に戻り、聖路加国際病院ほかで診療に当たるかたわら、『梅毒の診断上の注意と其の療法』（日本医書出版、一九四七年）などの著書も出版した。晩年、日本脳炎を患い、身体が不自由になってからも聖書を手離さず、主日礼拝に行こうとした敬虔なキリスト者であった遠山にとつて<sup>31</sup>、立教での六年間、特にその後半は懊悩に満ちたものだったに違いない。彼が静謐な日々を取り戻すには、変わり果てたこのミッシヨンスクールを辞するほかなかったのである。

## 註

1 中野実「昭和戦前期の私立大学―立教大学の場合」（『立教大学教育学科研究年報』第三五号、立教大学文学部教育学科研究室、一九九一年）五六頁。

2 永井均・西成健「日米開戦と立教大学―史料紹介・遠山郁雄 立教大学学長『日誌』（『立教フォーラム』第六号、学校法人立教学院、一九九七年七月）九―一〇頁。村田恵次郎氏と

- 筆者による大越光代氏（郁三氏ご令嬢）へのインタヴュー（一九九七年三月二十四日、大越正秋邸にて）。
- 3 立教大学文学部の奈須恵子助教のご指示による（二〇〇四年二月一日）。
  - 4 大澤真帆子・木部徹「遠山郁三『日誌』への保存修復手当て―日本で初の脱酸・抗酸化大量処置」、『立教』第一九〇号、立教大学、二〇〇四年九月）八一―一〇頁。
  - 5 経歴・著書については、主として以下を参照した。『人事興信録 下』（人事興信所、一九四一年一〇月）ト・二五頁。立教大学総務部人事課所蔵の履歴書。北村包彦「遠山郁三先生」（『鉄門だより』第一八号、東京大学医学部鉄門倶楽部、一九五一年二月二五日）一面。国立国会図書館蔵書検索・申込システムによる「遠山郁三」の項目の検索結果（<http://opac.ndl.go.jp/Process>）。
  - 6 能勢岩吉編『日本博士録』（教育行政研究所、一九五六年）医・大正三・三二頁。
  - 7 大越正秋「父 遠山郁三を偲ぶ」（同手記は大越正秋氏より御提供頂いた。なお、手記は日本聖公会東京聖テモテ教会の機関誌、『葡萄園』第二二巻第二二号、一九五二年二月一日、二頁に掲載されている）。
  - 8 前掲、北村「遠山郁三先生」一面。
  - 9 前掲、大越光代氏へのインタヴュー。
  - 10 高瀬恒徳編『弥生が丘の教会―七十年の歩み』（日本聖公会東京聖テモテ教会、一九七三年）一四八―一五〇頁。
  - 11 前掲、大越光代氏へのインタヴュー。
  - 12 海老沢有道編『立教学院百年史』（学校法人立教学院、一九七四年）三五六―三五七頁。立教学院百二十五年史編纂委員会編『BRICKS AND IVY―立教学院百二十五年史図録』（学校法人立教学院、二〇〇〇年）六八頁。当時の新聞報道のいくつかは、立教学院百二十五年史編纂委員会編『立教学院百二十五年史 資料編第一巻』（学校法人立教学院、一九九六年）四四〇―四四六頁に収録されている。
  - 13 木村学長の学長退任と同じ日、一九三六年七月七日に須藤吉之祐が学長事務取扱に就任し、遠山が学長として着任するまでその任にあった。
  - 14 H. St. George Tucker, "Report on St. Paul's University, Tokyo," 28 June 1937, Record Group 79, Historical Files-Japan, St. Paul's University, Archives of the Episcopal Church, Austin, Texas, USA.
  - 15 「財団法人立教学院第二十回理事会（記録）」一九三六年一月六日、同第二二回記録、一九三六年一月三〇日（学校法人立教学院本部事務局所蔵）。
  - 16 Norman S. Binsted to John W. Wood, 16 Nov. 1936, Record Group 71, Japan Records, Archives of the Episcopal Church, microfilm Reel 38（日本聖公会管区センター所蔵マイクロフィルム）。なお、タッカー主教もまた、前述の報告の中で「立教の発展において大変厳しい情勢にあって、学園を運営す

る人材として遠山博士を確保できたことは、本当に幸運であつた」と記している。

17 学長就任の辞令は一九三七年三月三一日に発令されている(立教大学総務部人事課所蔵の人事カード、および財団法人立教学院「昭和十一年度事業報告書」立教大学立教学院史資料センター所蔵)。

18 縣康「遠山先生追想」(『立教』第一七号、一九六〇年五月)五一頁。

19 遠山郁三「学長就任に当りて」(『立教学院学報』第四卷第四号、財団法人立教学院、一九三七年五月五日)二頁。

20 『立教大学新聞』一九四一年二月一〇日付。

21 「財団法人立教学院第三十六回理事会記録」一九四〇年一月五日。

22 Charles S. Reifsnider to John W. Wood, 14 Nov. 1940. Record Group 79, Historical Files-Japan, St. Paul's University, Archives of the Episcopal Church, Austin, Texas, USA.

23 Ibid. 前掲「財団法人立教学院第三十六回理事会記録」。

24 医学部設置問題については、前掲『立教学院百二十五年史資料編第一巻』七三五―七六一頁を参照。

25 前掲、永井・西成「日米開戦と立教大学」一二頁。

26 永井均・豊田雅幸「立教学院関係者の出征と戦没に関する若干の考察」(『立教学院史研究』創刊号、立教大学立教学院

史資料センター、二〇〇三年三月)一二八―一三二頁。

27 前掲、大越光代氏へのインタヴュー。なお、チャペルはその後、正式名称だった「立教学院諸聖徒礼拝堂」を「立教学院修養堂」に改め、学内伝道の目的や公的行事の場として利用することも禁じられた。一九四四年夏頃にはガラクタ類が山積みになれ、「チャペルの扉はがっちり閉鎖」されたという(永井均・豊田雅幸「戦時下の慰霊祭―立教学院関係戦没者の追悼をめぐって」『立教』第一七五号、二〇〇〇年二月、七八―七九頁)。

28 前掲、縣「遠山先生追想」五二―五三頁。

29 実際には、学院・大学首脳の一部から辞職を迫られたようである。例えば「日誌」には、一九四三年一月二五日に遠山が予科長の曾禰武教授から「只今学校の内外の情勢が小生の知る限りには、先生の御在任を許さざる事態に立到つてゐる」とし、「御勇退」を勧告する手紙を受け取り、翌二六日の学院理事会で理事たちの勧めに従って辞意を表明した経緯が記されている(遠山郁三「日誌」一九四三年一月二六日条、立教大学立教学院史資料センター所蔵)。

30 同前、遠山「日誌」一九四三年一月三〇日条。「財団法人立教学院第五十九回理事会記録」一九四三年二月二日。

31 前掲、高瀬編『弥生が丘の教会』一五〇頁。なお、遠山は一九五一年一月二日、脳軟化症のために死去した。